

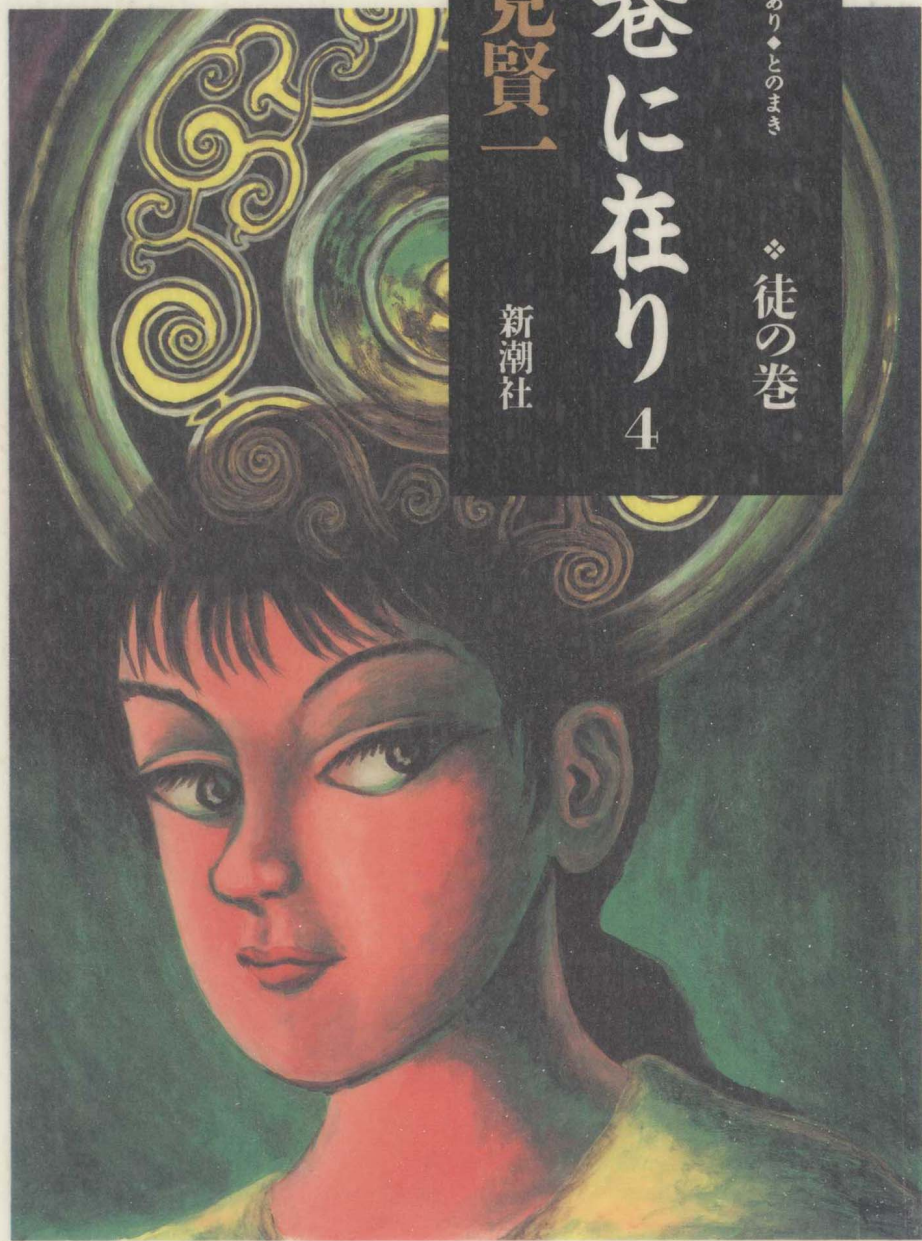
ろっころにあり◆とのまき

❖ 徒の巻

陋巷に在り 4

酒見賢一

新潮社



ろくろこうにあり◆とのまき

❖ 徒の巻

陋巷に在り 4

酒見賢一

新潮社

陋巷に在り 4 徒の巻

一九九五年一月二〇日発行

著者 酒見賢一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（営業部） 03—三三六六—五一—

（編集部） 03—三三六六—五四—

振替 東京四—八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。



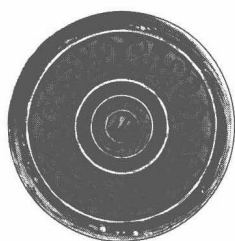
© Kenichi Sakemi 1995,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り）
（下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-375107-X C0093

陋巷に在り

4 徒の巻
目次



彷徨(二)

113

彷徨(二)

79

暗闘(二)

62

暗闘(二)

41

蟲

7



徒
(四)

212

徒
(三)

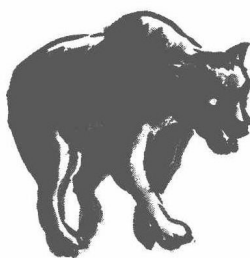
174

徒
(二)

153

徒^と
(一)

136



装画・カット
諸星大二郎

装幀

新潮社装幀室

陋巷ろうこう
に在あり

4
徒との巻

徒 初形は辻に作り、土声。土は社の意で、もとその社に属するものを徒と称したのであらう。徒は俗字とされているが、金文にまたその字形に作るものがある。「説文」二下に「歩して行くなり」とあり、車乘に対して徒行することをいうとする。それで従者の意となり、軍において装備なきものの意となり、人においては無為という字となる。古くは司徒の職を司徒と称しており、人民はその土、すなわち社に属するものとして扱われた。すなわち氏子であった。



「えらいことになったな」

と顔路は呟いた。二日半ほど降り続いた陰鬱きわまる雨は今朝にはあがっていた。しかし、道はあちこちぬかるみ、水溜りを跳ねてよければならない。

顔路が顔穆の死を知らされたのはつい先日であり、すぐに孔子の邸に行った。そこで穆の屍を見せられたときには絶句してしまった。

（あのじじいが、おれより先に死ぬとは、ついぞ思ってもみなかったのに）

じじいとは顔穆のことである。信じられぬ思いを抱きながら顔穆の屍を丁寧拝した。

その後、孔子の邸で仮喪儀を行うことになり、三日をかけた。その間に南門近くの辻に置き捨てられていた変死体も孔子の手によって回収され弔された。豪雨の為、かれらもそれほど人の目にさらされることなく済んだ。

そして、今日の朝早くに尼丘山へ穆を送ってきた。野辺送りは何分にもひそかなものであった。

顔路は先に抜けて帰ってきたところで、顔回はまだ孔子邸に残って喪の始末を手伝っている。

孔子は口には出さなかったが、下手人として、少正卯の名が心に浮かんでいたであろうことは疑いない。

（しかし、やったのが少正卯の手だとしても、理由は何だ？ 奴の狙いは魯の実権なんだろう。

顏儒を殺す理由はないぞ)

孔子は一体どう対応するのか。場合によっては顏路も久しぶりに物を考えねばなるまい。

(それにしても)

恐いのは具体的な話である。

(穆の爺様をやるる奴が少正卯の所にいるっていうのか)

顏路のような喪礼の小技の他は何の技術も身につけなかった極楽とんぼな儒から見ると、顏穆の戦鬪に関する技術の冴えはまさに神技であった。さらに顏穆は呪禁にも通曉していた。いかに相手が南方巫者であろうと、まともに呪詛を受けてしまうようなこともまず有り得ないことだ。

結局、

(やっぱり、あの爺様も歳にや勝てなかったんだらう。歳をとればどんな強者にもやきが回るということか)

と顏路は無理に自分を納得させるように結論したのであった。

路地を曲がると顏路の家のはす向かいに住んでいる丁という男の古女房に出食わした。

「おや、顏路さん」

古女房は、歯を見せて笑うと、顏路の袖を掴んでぐいと引いた。

「おい、何だ。昼間からおれを引っ張りこもうって気かね」

と顏路が言うと、古女房は耳に口を寄せて、

「すごいじゃないさ。あんなのが家に来るのかい」

といやらしく笑って、顏路の背中をひっぱっていた。

「あんなの、たあ、なんだ？」

顔路は背の痛みにしかめ面で言う。古女房だけあって力が強い。

「あたしゃくやししいけれど、どぶに住んでいる泥亀だと、ずいぶん情けなくなったわよ」

「だから、何のはなしだ」

「子淵さんのアレなんだろうけど、まあ、もったいないこと。あんた、手えついたりしなさんなよ」

と、妙な笑い方をして、小肥りの身体を擦り寄せて、肘で顔路を突つくのである。

顔路はいい加減腹を立てて、

「馬鹿野郎、一人合点でにやにやしやがって。おれには何のことかさっぱり分からんぞ。それで色目を使ってるつもりか？　あまりふざけるようなら、丁の阿呆にお前に誘惑さそわれたと言いつけてやってもいいんだぞ」

と罵った。しかし、近所の気安い顔であり、顔路の怒った面に貫禄がないので、古女房、まったく動じない。

「あはは、それもいいわね。そうだねえ。だけどサ、ウチの亭主にはあれは目の毒だわね」

「……」

とにかく話が見えていないのだから、何とも言いがなかった。

「顔さん、早く引っ越しなよ」

「勝手をほざくな」

「まあいいさね。そうそう、お日様が引っ込まないうちにやらなきゃなんないんだわね。それじゃ、また今度ね」

「おい、待て」

古女房は洗濯に行く途中だったようで、布の塊を抱えていた。妙な笑いを浮かべたまま行つて

しまった。

「何だ、あのど嬢あめ。女もああも擦れきっちゃ、おわりというもんだぞ」

顔路はぶつくさ言いながら、自分の家に向かった。

家に踏み込むと足はぴたりと止まった。丁の女房がほめかしていた怪つ態の意味がすぐに分かった。顔路の家などは開けっ放しのようなもので、犬や、猫、時には近所の小娘などが無断で入り込んでゐることもある。しかし、今回はそんなつまらないものではない。

(こいつはたまげたな)

顔路はしばらく呼吸を忘れてしまった。若い女が入り込んでゐるのである。それもかなりの上玉であつて、見ようによつては、かなりどころの程度ではなかつた。衣服も絹をふんだんに使つた贅をこらしたものを着ており、腰の瓊の細工物も目の玉が飛び出るほど高価なものであろう。とても庶民の身に着けるところのものではなかつた。

そういう陋巷にゐるはずのない者が、それが汚い筵席の上に上品に坐つてゐるのである。

その女というのは言うまでもなく子蓉であつた。

「勝手をさせていただいております。無礼をいたしました」

と言つた。

「おっ」

と顔路は声を出した。そして、子蓉の整つた姿形をまじまじと見つめたまま、何も言わない。その見つめようは執拗で、悪く言えば下卑た目つきと言つてもいい。失礼そのものというべきであつた。

顔路はいったん入口で躊躇したものの、ここはわが家だと思い直し、するすると陋屋に入ると、

子蓉の前にどかりと坐した。しかも、その動作の間中、視線はずっと子蓉の顔にあてられたままである。用心の為などではさらさらなく、単に見とれているだけであろう。

子蓉は媚疊びじを使つてはいなかった。とくに必要がなければ今日は使うつもりはなかった。しかし、これだけ熱心に見つめられると媚を射つ必要もないと思われる。

(この男、ほんとに顔淵がんえんと血が繋がっているのかしら)

まず顔付きが似ていない。雰囲気もまるで違う。子蓉ならずとも、抱く疑問である。顔親子の似ている点を無理に数えようとするならば、滅多に物怖じしないというところであろうか。

顔路はなおも飽かず子蓉の顔を眺め続けている。

「ふーむ」

腕を組んだ。次第に目もとが垂れさがり、やや不謹慎な面つきとなつていった。さすがの子蓉もこれほど男からあからさまに注視された覚えがなかった。普通の男は子蓉と顔を合わせると避けるように横を向いた。貴人も佳人も直視すべからざるものであるというのが礼ではある。貴人はおくが、佳人の場合は、要するに直視したいところだが臆病なり遠慮なり羞恥なりの理由で目を合わすことが躊躇ためらわれるのであろう。やがて下心を隠せない目付きで、ちろり、ちろりと盗み見はじめるのである。

ところが顔路は堂々と穴が穿くほどに子蓉を見つめて、下心もべつに隠す様子がない。見て悪いか、と言わぬばかりの表情をしている。

(あきれた狒狒ひひじい爺なのかも……。顔淵の堅物かたぶつがこの半分も軟派であればちょうど間に合うにちがいない)

この執拗な視線が顔回のものであればと考えていると、子蓉の耳たぶが知らぬうちにあか緒あかくなつた。いつもとは逆に子蓉が面をややうつむけてしまった。

(まあ、かわいいのね)

子蓉は自分に対してそう言った。その心裡では顔路に対する好奇心がむくむくと頭をもたげてきていた。

(この男もおもしろいこと)

いまだこれほどあつげらかと視線を浴びせる男に会ったことがない。南の涯に住む礼も何も心得ぬ野人が相手でも、子蓉にその視線を穿ち続けることは躊躇ったものだ。

(どうして顔路のまわりにいる男どもはこうも面白いのかしら)

と子蓉は思った。妙に癖のある男が嫌いではない。

予定を変えてこの男を蕩し込んでみるのも悪くはないと、媚術の次第を考えていると、顔路がほーっと溜め息をついた。

「気に入った」

何だか情けなさそうに言った。

「はい？」

子蓉はつい釣り込まれるように言った。

「困ったものだが仕方あるまい」

と顔路は頷いている。

「何がお困りなのです」

子蓉が訊いてしまっていた。これがもし呪詛の掛け合いであつたなら、子蓉の受け負けである。

顔路はもう一度、

「いや、気に入った」

と言うと、ごろりと横になって肘で枕をついた。行儀の悪さはいつものことである。

「ああ、申しおくれました。お初にお目にかかります……わたくしは」

と子蓉が続きを言おうとすると、顔路は手をあげて言った。

「いや、皆まで言うな。綺麗なお姐さんおえを間近におがめて、よい回春になっているところだ。氣に入っただから、野暮やぼなことは言わんでいい」

子蓉が珍しく氣を飲まれて、きよとした顔となった。

「あの、わたくしは」

とあわて氣味に言うが、顔路がまた遮さへぎった。

「うむ。ポツとした顔もいいものだ。やはり女にはこのくらいせの差さがないとな。丁の女房の嘆くまいことか。だが自業自得だな。お前、歳をとつても丁の女房のような冀くそ嬢めかけアにならんように氣をつけるようにな」

と顔路は別に恥じているわけではない子蓉に説教するように言った。

「あの、勘違いなされておられませんか。わたくしは」

子蓉はなおも言いつのつた。顔路は手を振ってぶらぶらさせて、

「いいと言っているのに。せっかくいい気分でいるんだから、つまらんことを聞いて水をさされたくないぞ」

と聞かない。

（一体、どういう男なんだろう）

と一瞬、子蓉は首を捻ねった。

子蓉が困った顔をしていると、顔路は鼻糞をほじりながらにたりと笑い、言った。

「お前だろう？ お調子者の子貢を軽くあしらった上、うちの回にまでちよっかいを出そうとしている、ちよいといい女つてのは」

子蓉は、はっとした顔になった。緊張が背筋を走った。この妙な親父は儒なのである。やはり容易ならぬ相手と考えておいた方が無難であろう。そうと思えば顔路のふつ切れた品の無さも、じつは堂に入った恍惚技とも見えてくる。これは油断ならぬというところであつた。

「わたくしをご存知でしたか」

子蓉はどこか嬉しそうに言った。顔路は当たっても嬉しくはない。

「存知ているも何も、そんな裏でもなきやあ、ここにあんたみたいな別嬪が訪ねて来るなんて有り得んことだ」

と指先を弾いて鼻糞を飛ばして、残念そうに歯を見せた。

大袈裟なことをいえば子蓉は敵地へ乗り込んできているのである。相手次第では大袈裟なとえではなくなる。しかし、子蓉はかえって楽しくなってきた。与し易い者を相手にしてはこの胸の弾みは得られぬものだ。それも、子蓉がいついかなる場合でもおのれの優位を信じて疑わないという、余裕のなせる心理ではあつた。生まれて初めてこの余裕が揺さぶられ、覆されそうになったのは顔回との前年の事件だけであつた。だから、顔回にもうしばらく執着してみたくないのであろう。この執着心は、顔回が子蓉に籠絡されてくらのようなつまらない男になつてしまふか、逆に顔回が子蓉を殺してしまふか、そういう決着がつかねば息むことはないであらう。子蓉の方から関心が失せることはおそらくあるまい。

子蓉のような女がはるばる魯まで辿り来て、「男」に遭えないというのなら、旅遊の無意味なることじつにきわまりない。味気なさに身と心が腐つてしまふかも知れない。ただでさえ少正卯の束縛をうけ、惡悦の陰湿な邪氣にまといつかれ、身悶えせんばかりの苦痛と不満に被われている身である。「男」に遭うくらいの天の賜物も与えられぬというのなら、子蓉の桁外れの生